



しずく
須藤 雫さん

●城北小学校6年

笑顔をつくるあこがれの看護師

私の将来の夢は、看護師です。看護師になりたい理由は2つあります。1つ目は、おばあちゃんが看護師の仕事をしていて、かっこいいなと思ったからです。2つ目は、人を笑顔にすることが好きだからです。

図書室の本を読んで、今、看護師が不足していることが分かりました。将来看護師になって、入院している人や病気で苦しんでいる人のお手伝いをして、たくさんの笑顔を増やしていきたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの メッセージ



気が付くとカレンダーも最後の一枚となりました。一年の締めくくりの師走、皆さんいかがお過ごしでしょうか。

今年を振り返りますと、やはり4月に行われた市長選にて、市民の皆さんから信任を受け、無投票による4期目の市政運営を任せてもらったことが挙げられます。市長として課せられた使命と責任の重さを忘れることなく、さらなる本市の伸展に向け全力を注いでいきます。

そのほかには、先月9日に「佐野インランドポート」の開所式が行われました。これまで約20年にわたり思い描いてきた「内陸の港を佐野へ」という構想が実現し、私も感無量です。海上輸出入のコンテナの保管や積み替え、通関手続きの支援などが可能な施設として第一歩を踏み出しました。今後、新たな物流拠点として広範囲に活用されるよう努力していきたいと思えます。

また、先月25日・26日に開催された「全国山城サミットin佐野」も、もちろん挙げられます。当日の様子については、来月号の広報さので詳しく取り上げたいと思えますので、ご期待ください。

さて、ウインタースポーツも盛んになってきました。今月10日には、年末恒例のさの馬拉ソンが行われます。毎年多くのランナーが本市に集い、健脚を競います。「沿道からの温かい応援が忘れられず、また参加しました」との声をよく耳にします。今年もランナーへの熱い声援をお願いします。

また、佐野日大高校が、第70回県高校駅伝競走大会で2年連続16回目の優勝を飾り、今月24日に京都市で開催される全国高校駅伝競走大会に出場します。本市としても大変誇らしく、全国ではベストを尽くし優勝を目指して頑張ってもらいたいと思います。

忙しい年末を迎えます。皆さん、体調に気をつけてお過ごしください。

岡部正英

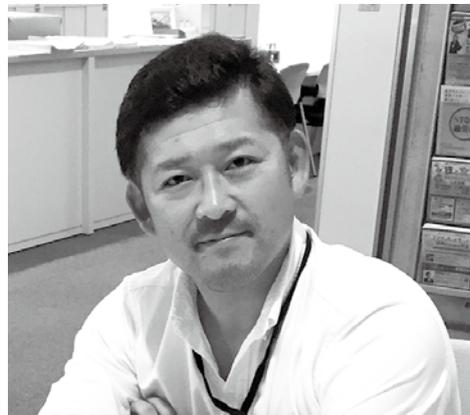


今回の表紙 「第13回佐野市民駅伝競走大会」平成29年11月12日撮影

市内の体育協会14支部を代表する各年代の選手たちが、世代を超えてタスキをつなぐ佐野市民駅伝競走大会。市役所を発着点とし、県道桐生岩舟線と東西の産業道路を走る9区間・19.5kmのコースで実施され、植野支部が初優勝を飾りました。

【結果】優勝：植野支部、準優勝：赤見支部、第3位：葛生支部

けんご
川内 健吾 さん
(大橋町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール

34歳。今年10月、地域おこし支援や地域活性化などに取り組む「地域おこし協力隊」の本市4人目の隊員として、埼玉県さいたま市より移住。協力隊員としての任期は3年間。

佐野にもっとワクワクを

「どうせやるなら楽しい方がいい！」これは、川内さんが仕事をする上で常に持ち続けている気持ちです。

川内さんは地域おこし協力隊員を務めながら、スポーツチームや協会などの運営コンサルティングやデザイン、ファンディング(事業資金の調達)などを行う会社、(株)Tena Adamを東京で経営しています。スポーツにおいても組織や経営の意識を顧客にもつてもらおうようにしているそうで、「チームはプレーをしているだけでは成り立たない。環境の整備やメンバー・支援者の獲得、応援してくれるファンづくりを含めた組織としての経営が大切」と語ります。その経験を佐野市が掲げるスポーツ立市に活かせるのではと考え、協力隊員に応募しました。

「自分が満足していなかったり、面白いと思っていなければ、周囲の人も満足しないし面白いと感じません。まずは自分が楽しむこと。時には形にこだわらず、冒険が必要なきもあるんです。例えば100人中99人が良いと思うより、1人が良いと思う方を選択することが、将来的に大きく飛躍することがあります。99人が良いと思うことは誰でも思いつく。佐野市にしかない、

佐野市だからできるスポーツみたいなものを面白く発信していくことで、佐野に行ってみようという気持ちに繋が

り、人を呼びこむことができる。もしかしたら佐野市発祥のスポーツイベントが誕生して、世界的に広まるかもしれない。そうすれば佐野市からスポーツを通じてハッピーを提供できるんです。想像するだけでもワクワクしてきませんか！市役所で一緒に働く職員にも、もっと楽しんでほしいんです」と笑顔で話す姿を見て、つい私も川内さんの考えに聞き入ってしまった。

川内さんは現在、市内の企業や製品とスポーツをコラボレーションして、市内スポーツの発展、さらには経済の発展にも繋がるような企画を考えているそうです。

最後に、いつも前向きに行動できる秘訣を聞いてみると、「常に一生懸命、目の前の仕事に全力を尽くすこと。そうすることで、自然と新しい発想・発見・出会いに恵まれるものです」と答えてくれました。

地域おこし協力隊員としての活動はまだスタートしたばかりですが、今後の活躍が楽しみです。

(市民記者 飯田瞬)



泥深い田んぼを、ドンベッタ
とかヌカリッタなどという

「泥土どろつちに関連する方言のうち、日常的によく使われている(あるいは使われていた)ものを取り上げてみました。雪が解けたら、霜が解けたりすると、地面が粘土状になり、泥深くぼみができたりします。このようにどろどろになったところを、ヌカリットまたはヌカリッタマといいます。

「うっかりわき見して歩いてたら、ヌカリッタマにツッペツチャッテ(足を踏み入れて)さあ、ジョーリ(ぞうり)もキモン(着物)のソソ(すそ)も、ゼンテ(すつかり)ピッチョビチョ(びしよびしよ)ンなっチャッた」

ヌカリットの「ト」は、「ところ」という意味。ヌカリッタマの「タマ」は、泥がたまっている「くぼみ」という意味です。特に泥深くてどろどろしている田んぼは、ドンベッタ、略してドンベともいいます。泥深い田んぼなのでドロップケータ、ぬかるみが多いのでヌカリッタともいいます。山ぎわの湿地であつても、稲の栽培は可能だということから、昔はそこを整地して田んぼにしました。これを飛駒地域ではサワツタ、仙波地域ではヤタ、御神楽地域ではドンベッタなどといいます。だが水温が低く、収穫は少なかつたといわれています。

「ヤタの田植えは、ドロップケートコ(泥深いところ)と、そうでネットコがあつて、足もからだも思うように動けネーから、仕事がかどんネーよ」

今では、サワツタとかヤタということばは消えてしまいました。ヤタはアイヌ語のヤチ(湿地)が変化したものといわれています。

(市民記者 森下喜一)

